

2020 The New Earth

A travel report

——ネイサンの物語——

26. サミラの物語

僕は彼女の後について海に入っていく。これまでなかったほど、海水が気持ちよく感じられる。毛穴の一つ一つが塩分を含んだ海水を感じている。全身が浸かると、細胞の一つ一つが生喜びを祝っている。サミラが僕を引き寄せて目を見つめ、キスをした。僕は溶けてしまう。こんなにも僕たちは互いに**一つ**だったのか。彼女のタッチは電撃的で、僕の体は震え出したが、あるがままにまかせる。僕たちは、純粋なエネルギーになる。それは僕たちであるというエネルギー。他には何も存在しない。**あらゆるものがこのエネルギーからできているのだから**。二人の周りの海水も僕たちの一部。島も地球全体も宇宙も。このエネルギーの他に何も存在しない。体験されるすべてのものは、このエネルギーからやってくる。

僕たちの愛が爆発し、文字通り、二人同時に絶頂感に達した。それは波となって僕たちの体を流れている。SEX と簡単な触れ合いだけでこうなるのだ。僕たちは歓喜のうめきと叫び声を発する。それから発作みたいに笑いが止まらなくなる。足は地についていても、僕たちは飛んでいるようだ。僕たちは互いに愛し合っている。自分たちを、他の人たちを、周りの何もかもを無限に愛している。どんな言葉をもってしても、言い表すことはできないほど愛している。

誰もそれを言い表すことはできない。それを経験するしかないのだ。そして僕たちは、それを経験していたんだ。しばらくして、僕たちは浜辺へ戻った。僕がタオルを敷くと、彼女が僕の隣に横たわる。愛の中で、お互いを見て、また笑い出す。

「人生は良いものだよ」僕の内側でステファンの言葉が聞こえる。「決してそれを忘れちゃいけないよ！」

そうだね、小さな兄弟。君の言う通りだよ！ もうどうしたってそれを忘れようがないだろう？ 思い出させてくれてありがとうな。僕には本当に、本当に、本当に必要なことだった！ もう二度と忘れないよ。

沈黙の後で、サミラが話し始めた。

「あなたにすべてを話さないのは、不公平に思えるかもしれないけれど、その理由は理解してくれているわよね。これからあなたに話すことは、私たち二人に関係することなの。あなたと、いつ、どこで出会うかは言わないつもり。ただ、その出会いが私にとってどういうものだったかを話したいの。もうすぐ 2015 年に戻ろうとしているあなたにとっても、そして戻った後のあなたにとっても、"今、ここに" 居続けるために役立つことだと思う。私はあんまり幸せじゃなかった。人生なんてつまらなかった。がっかりすることばかりだったわ。妹のタマラは違っていた。私の目から見て、彼女はふしだらで誰とでもベッドを共にした。自分の娘も、一緒に暮らすボーイフレンドもいたのによ。小さなエバは私にとって何よりも愛しい存在だったけど、私はタマラの中に私とは正反対のものを見て憎んでいた。私はタマラのように男性に近づくことができなかったから。私はたくさんの点で自分を疑っていた。私はタマラに嫉妬し、自己嫌悪と引っ込み思案のまま埋もれていた。ある日彼女が私の所に来て、私の理解できない無意味なことを泣きながら話していたの。

彼女が私に、ある本を手渡して言ったわ。『これを読んで！ 私たちみんなを救ってくれるから。私、お姉さんのことだって愛しているのよ』それが、あなたの本というか、パウチの本というか、とにかくあなたの物語だった。彼女が去って、退屈していた私は本を手にとって静かに読み始めた。最初のほうのページに、私と同じ名前の美しく可愛らしい女性が出てきたので、話が気に入って読み進めたの。そして私は、物語に出てくる特定のプロジェクトや名前が、想像されたものではないことに気がついた。すべてインターネットで見つけられたからよ。アンドレ・スターンと Birkenbihl は知っていたけど、ジェフ・ロートンには知らなかったのだから Google 検索で調べた最初の名前よ。それからというもの、私は夢中

になった。物語の中に事実があることが分かって一気に読んだわ。読むのがやめられなくなったの。タマラの話のところでは、こんな世界になってほしいと熱望し、希望も出てきた。私自身に関しても、本の中のサミラが私であればいいと本当に願ったわ。そしてどうやらそうらしいとも感じた。私は何もする必要がないことが分かった。ただ、本の中のお誘い——物語の一部になることと、あなたを見つuckerこと——を受け入れればいだけ。私は、あなたも私を探していると感じていた。少なくともそう願っていたわ。私は OKITALK ショーを聞き出した。本も人に譲って宣伝もし、他の人たちとも連絡を取り始めたの。私は、突然喜びに生き始めた人に、どんどん出会うようになった。私は自分の殻から這い出て、オープンで近づきやすい人間になったの。そうしたら人生は、毎日もっと面白いものになったわ。そしてある日……**おっといけない**、あやうく言うところだった。あなたがいたのよ。誰もあなたのことが分からなかった。バウチはいつも、あなたが誰だかばれないようにかばっていたから。でも私にははっきり分かったわ。あなたの目に表れていたからよ。無限の喜びが。あなたは思慮深くもそれを隠そうとしていたけど、ちょっと隠せる自信がなかったみたい。私は、あなたがずっと待ち続けていたものを見たことが分かった。あなたが目を逸らすことができなかったからよ。**私から**。私の胸はドキドキして世界が溶けていくように感じた。私たちはお互いに近づき合って、互いの腕の中に身を任せた。

『僕がネイサンだ』とあなたが言い、私はこう答えた。『分かってる！』

私たちは互いの目を見つめ、キスした。それからは、何もかもが違っていったわ。私はまったく新しい人間になった。独立心を持ち、真っ直ぐに顔を上げ、正直な。できる限りそうしているわ。私は蝶になったのよ。あまりにも長かった芋虫の期間を経て。それ以来、私はあなたの女だったし、あなたが自分のことを、私の男と呼ぶのをとても光栄に思うわ。その関係にそれ以上の誓いなんて必要なかった。そんなにいつもいつも会わなくなたって、私たちの愛は壊れない。あなたにはあなたの人生があり、私には私の人生がある。近頃ではそれが普通のことなの。でもお互いが新鮮な気持ちで会うときには、その機会を最大限に活かして、笑い、愉しむわ。私は自分が**完全な**存在になり、癒やされたように感じるの。それはあなたがいるからよ。**いつも**私の胸の中にいる。私がオンマインドゲームに夢中にな

ったとき、私は自分の内側であなたを知覚することが上手になったの。そしていつでもあなたと意思疎通できるようになった。一日に何度もやり取りしているわ。相手を渴望したり、失うことを恐れたりせずに、無条件の愛と感謝の気持ちと共にやり取りしているの」